男 の 居 場 所

唐木　茂樹（岡山県獣医師会会長：岡山県職ＯＢ）

数１０年程前は今よりも貧しかったけれども心の余裕も正義感も礼儀もあったような気がしている。

朝の通勤、通学のバスの中で２０歳前後の女子学生のお嬢さんが「内のオトン、オカンが云々」と言って呵々大笑いしているのを聞いて誰が良いのか悪いのか考えさせられた。

こんな事は兎も角、昨今の日本列島は尊属殺人をはじめ嘘八百の流行などなど確かに従来の日本とは歯車が少しづつ狂いがあるのではなかろうか。どうしてだろうか。完全な原因はわからない。但し、経済の逼迫が一因であることは間違いなかろう。

ご記憶の方もあろうかと思われるが、１年前、いや半年前だったか「いざなぎ景気の到来」の活字を読まれた方々は多いと思うが、そしてすぐに「いや、景気の上方修正」いや「下方修正」とめまぐるしく何が、どれが本当なのか全く理解しがたい。

庶民、つまり一般の人と呼ばれる人は日本の８０％を占める。庶民は増税、負担増、物価高で支出は増加、収入は不景気と賃金カット等々で減少、景気が良いわけがない。

経済大国日本と言われたのは敗戦後、滅私奉公、粒粒辛苦の気概に満ちた猛烈社員等によって為された結果といっても過言ではないと思っている。

しかし、経済大国日本を為し得た当時の若者は最早､後期高齢者になろうとしていたり、なっている。ところが、現在の日本は世界一の借金大国であり１，０００兆円を越える。一人当たりの借金は８００万円を優に越える。景気の見通しは悪いと警告を発した方が納得がゆく。

庶民が理解できる方法、いや政治が必要であろうと思われる。どうして下さるんでしょうか政争に明け暮れている政治家の人々。先行き不安な空気を払うために有効な政策を打ち出すのは政治の力であろう。景気が混迷、後退する前に不安な空気を取り除かねばならない（山陽、社)。全国民の願いである。明治の気骨を思わせる政治家の出現を待ちたいと思うのは私ばかりではあるまい。

そこで提案したい

昔風なことを言うつもりは全くない。

男が誇りを取り戻せば必ず日本国はシャンとする

東京出張の際、たまたまラッシュ時の地下鉄に乗った。東京の人達は素早い。空いている席をめがけて男女を問わず突進する。どちらかというと男が早く座る。経済大国にした昔の若い男女に席を譲ったらどうか。男のゆとりなど無い、疲れているんだ、先ず自分だ。他人のことなど・・・・・そんな感じがするが男のゆとりは男の品位であろう。

松下電器の松下幸之助さんは、人間の値打ちはその人の創造力によって決まると言われた。ゆとりがないと創造的な発想など不可能で、おまけに視野が狭くなる。

巷で良く言われることに車のハンドルがある。ゆとりは人間を大きくし仕事が出来、ゆとりがあるから魅力がある。魅力があるから品位も生まれることによって同僚も部下も朱唇皓歯の女も運もついてくる。

戦国時代の「忍び」と言えば服部半蔵や猿飛佐助が思い浮かぶが「忍び」の任務とすれば情報収集や人間をあやめることの様だが「忍び」の有名な仕事に「鉄桶」の陣がある。早い話が堅い布陣の事でその第一義は相手の退路を断つことにある。結論から言えば、相手を完全に抹殺することになり相手も窮鼠噛猫となり、鎧袖一触の様に運ばないことか

ら大変な結果になることは明々白々であろう。

これを現代風に置き換えてみると、相手が悪いので同僚なり、上司が相手をコテンパンに叱って「忍び」の退路（逃げ道）を断つようなやり方は窮鼠噛猫か相手の自滅で軽くても色々な障害は長く残る事も事実であろう。

そこで、男のゆとりが絶対必要となる。つまり、攻め方も７０％で止め、３０％は相手の逃げ道を作るゆとりが必要で退路を断つことは避けねばならない。「忍び」であってはならないと思うし、ゆとり心を持つことが男としての風格や品位であり、これが本当の大和魂と思っている。

ある本に載っていた話だが、女優の高峰秀子さんに「人生で一番大切なものは何ですか」と尋ねたら「潔さですね」と答えて、日本人の心を持った人と言われていた。

日本が戦争に負けた時、多くの人が「間違った戦争だった」と言った。それまで、戦争に賛成し、協力した人間までもが「本当は反対だった」、「負けると思っていた」、「負けてよかった」云々。これは例題だが、そんなことは言わず、言い訳や弁解を一切しない人間の生き方の方が、いや男としてはその方が美しく上等と思われる。

街談巷説の感があって書いていることが十分な理論になっていないかも知れないが「男の美学、そんなもんで生きてゆけるか或いは飯が食えるか」と叱られそうだが、日本人が長い間培ってきた伝統、つまり大和魂と言うか、武士道と言うか、こんなことを表現するといかにも古風な感じがするが、これらの言葉は本当は「あたたか味ときびしさ」が同居するものであり、これが日本を救って呉れるものと深く信じている。

終わりに表現に失礼の段はご容赦下さいますようお願いします。